

修士論文（要旨）

2023年1月

随伴性認知に着目したペアレントプログラムの効果の検討

指導 小関 俊祐 先生

国際学術研究科

国際学術専攻

心理学実践研究学位プログラム 臨床心理分野

221J2001

岸野 莉奈

Master's Thesis (Abstract)
January 2023

Examining the Effectiveness of a Parent Program Focused on
Perceived Contingency

Rina Kishino

221J2001

Master of Arts Program in Clinical Psychology
Master's Program in International Studies
International Graduate School of Advanced Studies
J. F. Oberlin University
Thesis Supervisor: Shunsuke Koseki

目次

第1章：背景と目的.....	1
1.1 未就学児の保護者への支援の必要性.....	1
1.2 保護者へのアプローチ.....	1
1.3 保護者支援での変数設定の重要性と課題.....	2
1.4 本研究の目的と構成.....	3
第2章：研究1 ペアレントプログラムの有効性と課題の検討.....	4
2.1 問題と目的.....	4
2.2 方法.....	4
2.2.1 検索方法.....	4
2.2.2 選定基準と除外基準.....	4
2.2.3 結果表の分類.....	5
2.3 結果.....	5
2.4 考察.....	12
2.5 本研究の限界点.....	13
第3章：研究2 保護者支援における随伴性認知を高める手続きの検討—PRISMA に基づくレビュー—.....	15
3.1 問題と目的.....	15
3.2 方法.....	15
3.2.1 検索方法.....	15
3.2.2 選定基準と除外基準.....	16
3.2.3 結果表の分類.....	16
3.3 結果.....	17
3.4 考察.....	20
3.5 本研究の限界点と課題.....	22
第4章：研究3 日本語版 Parental Locus of Control Short Form Revised（日本語版 PLOC-SFR 尺度）の作成と信頼性・妥当性の検討.....	23
4.1 問題と目的.....	23
4.2 方法.....	23
4.2.1 日本語版 PLOC-SFR 尺度の作成手続き.....	23
4.2.2 調査対象者.....	24
4.2.3 調査実施時期.....	24
4.2.4 調査材料.....	24
4.2.5 調査手続き.....	25
4.2.6 倫理的配慮.....	25

4.2.7	統計解析	25
4.3	結果	26
4.3.1	項目分析	26
4.3.2	項目分析後の確認的因子分析	28
4.3.3	探索的因子分析	28
4.3.4	記述統計量の算出	29
4.3.5	内的整合性の検討	30
4.3.6	妥当性の検討	30
4.4	考察	30
4.5	本研究の限界点と課題	31
第5章	研究4 随伴性認知を高めるペアレントプログラムの試行と効果の検討	33
5.1	問題と目的	33
5.2	方法	33
5.2.1	対象者	33
5.2.2	介入回数と調査時期	34
5.2.3	介入内容	34
5.2.4	調査材料	37
5.2.5	分析方法	38
5.2.6	倫理的配慮	38
5.3	結果	38
5.3.1	ペアレントプログラム群 A さんの結果	39
5.3.2	ペアレントプログラム群 B さんの結果	39
5.3.3	ペアレントトレーニング群 C さんの結果	39
5.3.4	ペアレントトレーニング群 D さんの結果	40
5.3.5	ペアレントトレーニング群 E さんの結果	40
5.3.6	ペアレントプログラム群の結果	40
5.3.7	ペアレントトレーニング群の結果	41
5.4	考察	42
5.5	本研究の限界点と課題	45
第6章	総合考察	46
6.1	本修士論文のまとめ	46
6.2	日本語版 PLOC-SFR 尺度の汎用	46
6.3	随伴性認知をプロセス変数とした場合の効果	47
6.4	本修士論文の臨床的意義と今後の課題	47
引用文献		I
謝辞		1

第1章：背景と目的

保護者の子育てに対する支援方略の確立は、喫緊の課題である。子育ての悩みや不安を感じる保護者は、約 70%であることが明らかとなっている（文部科学省，2020）。また、保護者の心理的ストレスに関する調査によると、「言うことを聞かない」や「思うような食べ方をしてくれない」など、保護者の養育行動に子どもの適切な反応が随伴しない、といった保護者特有のストレスがあることが報告されている（松村他，2005）。加えて、未就学児への虐待が多いことも明らかになっているため（厚生労働省，2014），子育ての初期の段階である未就学児の保護者を対象とした，支援方略の確立が必要であると考えられる。

保護者の子育てに対する支援方略のひとつに，子どもの行動変容を目的としたペアレントトレーニングがある（免田他，1995）。ペアレントトレーニングは，子どもの問題行動の改善や育児ストレス低減などの効果が確認されている（免田，2008 など）。しかし，ペアレントトレーニングの実施によって獲得した養育スキルを実際の家庭場面で用いることが難しく，子どもの適応的な反応の出現を過度に期待してしまうことで，かえって育児ストレスが高まる可能性があるという指摘もある（吉田・野中・堀川・嶋田，2019）。このような保護者のストレスに関連する課題に対して，保護者が子どもの行動や自分自身の行動を整理し，肯定的に捉えることを目標としたペアレントプログラムが認識され始めている（アスペ・エルデの会，2014）。ペアレントプログラムは，保護者の抑うつや養育スタイルの改善が報告されており，全般的な保護者に一定の効果が期待されている（アスペ・エルデの会，2014）。しかしながら，ペアレントプログラムは文献レビューなどによって，どのような効果や課題があるのかは明らかになっていない。

また，保護者支援では「随伴性認知（知覚）」の変容を目指した介入が必要であるとされている（吉田他，2019）。随伴性認知とは，保護者自身の行動が子どもの行動の先行事象および結果事象として随伴するという相互随伴性（宇田川・蓑崎・前田・嶋田，2016），すなわち自分の行動に結果が随伴するかないかを判断する認知（服鳥・境，2019）とされている。さらに，介入効果の検討の際には，プロセス変数を介入のターゲットに設定することが重要であるとされている（杉山・新川・小関，2019）。プロセス変数を設定することで，単純に状態変数の変容を評価する従来の手続きとは一線を画し，特性的な変数の変容をもって有効性を評価することが可能になるため，結果的に長期的な効果の維持が期待される。

随伴性認知を測定することのできる尺度に，Parental Locus of Control（以下，PLOC）尺度（Campis, Lyman, & Prentice-Dunn, 1986）がある。そして，PLOC 尺度は，育児ストレスを予測する変数であることが示されている（Hassall, Rose, & McDonald, 2005）。そのため，PLOC 尺度で測定される随伴性認知をプロセス変数に設定し，育児ストレスを従属変数とすることが可能であると考えられる。

これらのことから，育児ストレスの低減に寄与する随伴性認知の変容を目的としたペアレントプログラムを実施し，その有効性について検討する。そして，未就学児の保護者を対象としたペアレントプログラムについて，効果的な手続きに関する示唆を提供することを目的とする。

第2章：研究1 ペアレントプログラムの有効性と課題の検討

研究1では、これまで実施されてきた我が国における保護者の支援について文献レビューを行い、対象者、介入の内容、介入の効果に関する実態の把握から、ペアレントプログラムに求められる今後の課題を明らかにすることを目的とした。その結果、ペアレントプログラムでは、保護者が子どもの行動を整理すること、保護者が育児や子どもの行動に対するさまざまな考え方ができるようになること、保護者自身のできていることを理解することが、育児ストレスの低減や育児への自信の増加、子どもへの対応の変化などに有効であることが示唆された。加えて、プロセス変数を設定している研究が十分でないことも明らかになったため、随伴性認知に焦点を当てて介入を実施することが必要であると示唆された。

第3章：研究2 保護者支援における随伴性認知を高める手続きの検討—PRISMAに基づくレビュー—

研究2では、随伴性認知を測定することのできる PLOC 尺度 (Campis et al., 1986) などを用いて介入研究を行っている、海外の論文を対象に文献レビューを行い、随伴性認知を高めるための有効な手続きについて検討を行った。その結果、保護者が子どもの行動や保護者自身の行動を理解すること、子どもの行動に対する捉え方を学ぶこと、介入内容を家庭でも実施できるようにロールプレイやワークシートを用いること、といった手続きが有効であると示唆された。

第4章：研究3 日本語版 Parental Locus of Control Short Form Revised (日本語版 PLOC-SFR 尺度) の作成と信頼性・妥当性の検討

研究3では、保護者の随伴性認知を測定することのできる PLOC 尺度の改訂版である Parental Locus of Control Short Form Revised (以下、PLOC-SFR) 尺度 (Hassall et al., 2005) の日本語版を作成し、信頼性と妥当性の検討を行った。その結果、3因子13項目が抽出され、使用に耐えうる最低限の信頼性と妥当性が確認された。今後は、保護者の LOC のアセスメントや、支援の効果指標として活用できる可能性があると期待される。そして、日本語版 PLOC-SFR 尺度は、項目数が少ないため、実施が簡便で回答者の負担が少ない尺度であると考えられる。

第5章：研究4 随伴性認知を高めるペアレントプログラムの試行と効果の検討

研究4では、研究2で実施した文献レビューの結果を踏まえ、随伴性認知に着目したペアレントプログラムの作成を行った。そして、研究3で作成した日本語版 PLOC-SFR 尺度で測定される随伴性認知をプロセス変数として設定し、従来型のペアレントトレーニングとの比較から、本研究で作成したペアレントプログラムの効果の検討を行った。その結果、ペアレントトレーニングよりも、ペアレントプログラムの方が随伴性認知の向上と育児ストレスの低減の効果が大きかったことが確認され、随伴性認知を高めることで、育児ストレスが低下する可能性が示唆された。

第6章：総合考察

本修士論文では、近年認識されつつあるペアレントプログラムの課題について整理をするなかで、育児ストレスに影響を及ぼす要因であり、介入可能なプロセス変数である随伴性認知に着目したという点で特徴的であった。そして、随伴性認知を測定することのできる日本語版 PLOC-SFR 尺度の作成を行い、信頼性と妥当性を検討した。そのうえで、必要最低限な介入回数で随伴性認知を高め、育児ストレスの低減効果を示唆したことに意義があると考えられる。このことから、随伴性認知というプロセス変数に着目することによって、育児ストレス向上の予防が可能になると示唆された。

ペアレントプログラムは、保護者がプログラムを受けたいと望んだ時に実施できることが求められている（アスペ・エルデの会，2014）。このような観点を踏まえると、本修士論文で作成したような、随伴性認知に着目したペアレントプログラムの普及が重大な課題となると考えられる。そのためには、随伴性認知に着目したペアレントプログラムの知見を積み重ねる必要があると考えられる。さらに、身近な子育ての専門機関は保育所であるとされていることから（武田，2008）、保育園や幼稚園、子ども園などでプログラムを実施すること必要があると考えられる。そのため、幼稚園や保育園、子ども園に対して心理師を配置することで、普及につながっていくと考えられる。

加えて、本修士論文は、随伴性認知といったプロセス変数に着目したが、質問紙を用いた自己報告のデータに基づいていたため、実際の日常生活の中で随伴性を認知できているかを理解できていない。このことから、保護者と子どもの相互随伴性について日常生活の記録を行うホームワークを用いるなど、質的なデータも併用しつつ、介入効果を検討していく必要があると考えられる。

引用文献

- アスペ・エルデの会 (2014). 楽しい子育てのためのペアレント・プログラムマニュアル
<https://www.mhlw.go.jp/file/06-Seisakujouhou-12200000-Shakaiengokyokushougaihokenfukushibu/0000068264.pdf> (2022年6月21日現在)
- Campis L. K., Lyman R. D., & Prentice-Dunn S. (1986). The Parental Locus of Control Scale: development and Validation. *Journal of Clinical Child Psychology*, 15(3), 260-267.
- Hassall, R., Rose, J., & McDonald, J. (2005). Parenting stress in mothers of children with an intellectual disability: the effects of parental cognitions in relation to child characteristics and family support. *Journal of Intellectual Disability Research*, 49(6), 405-418.
- 服鳥 秀幸・境 泉洋 (2019). 行動が報われる体験が随伴性認知の与える影響 宮崎大学教育学部紀要, 92, 19-30.
- 厚生労働省 (2014). 児童虐待の現状 https://www.mhlw.go.jp/file/06-Seisakujouhou-11900000-Koyoukintoujidoukateikyoku/0000108127_1.pdf (2022年6月21日現在)
- 松村 恵子・植村 裕子・三浦 浩美・野口 純子・小川 佳代・舟越 和代・榮 玲子 (2005). 母親の育児ストレスに関する研究 香川県立保健医療大学紀要, 2, 19-28.
- 免田 賢 (2008). AD/HD に対する親訓練プログラムの効果について 佛教大学教育学部論集, 19, 17-26.
- 免田 賢・伊藤 啓介・大隈 紘子・中野 俊明・陣内 咲子・温泉 美雪・福田 恭介・山上 敏子 (1995). 精神遅滞児の親訓練プログラムの開発とその効果に関する研究 行動療法研究, 21(1), 25-38.
- 文部科学省 (2020). 令和2年度「家庭教育の総合的推進に関する調査研究～家庭教育支援の充実に向けた保護者の意識に関する実態把握調査～」報告書
https://www.mext.go.jp/content/20210301-mex_chisui02-000098302_1.pdf (2022年10月6日現在)
- 武田 英樹 (2008). 地域に求められる保育士によりソーシャルワーク 近畿大学豊岡短期大学論集, 5, 15-25.
- 宇田川 詩帆・蓑崎 浩史・前田 駿太・嶋田 洋徳 (2016). 親の情報処理過程と養育スタイルとの関連 —視線追跡装置を用いた少人数によるパイロットスタディ— 人間科学研究, 29(2), 161-171.
- 吉田 遥菜・野中 俊介・堀川 柚・嶋田 洋徳 (2019). ペアレントトレーニングにおける親子の認知行動的特徴に応じたアセスメントと介入方法の検討 早稲田大学臨床心理学研究, 19(1), 169-178.